

研究課題:アカクロバ「SW Torun」

担当機関:農研機構・北海道農研酪農研究領域、道総研・上川農試天北支場、畜試、北見農試、
根釧農試

協力機関:なし

1. 来歴

- 1)品種名 「SW Torun」 (トルン)
- 2)育成機関 Lantmännen(ラントメネン)社、スウェーデン
- 3)導入者 ホクレン農業協同組合連合会
- 4)登録 OECD 2003 年

2. 特性概要(標準品種「アレス」との比較)

長所は混播収量が高く、越冬性がやや優れることである。

- 1)早晩性:開花始日は標準品種と同等からやや遅く晩生に属する(表1)。
- 2)混播適性:マメ科率は標準品種と同等で2年目で30%台であり、3年目は虫害が発生した場所を含んでも20%程度あるので、混播適性は高い(表2)。
- 3)競合力:開花程度は標準品種と同等からやや低く、2番草の草丈は同程度である(表1)。よって競合力は同等と考えられる。
- 4)越冬性:越冬性関連形質は標準品種よりやや優れる(表1)。
- 5)永続性:RCの3年目/2年目収量比、RC+TYの3年目/2年目収量比が標準品種とほぼ同じであるため(表1)、永続性は標準品種なみと考えられる。
- 6)耐病性:うどんこ病、黒色小粒菌核病とも標準品種なみである(表1)。
- 7)収量性:混播収量は標準品種より高い(表3)。単播収量は標準品種より低い(表4)、単播で用いられることはないので、実用上支障ない。

表1 主要形質の調査結果

	SW Torun	アレス	評価基準	備考
開花始日(1番草)	7月3日	6月30日		北農研単播2014年
着花茎程度	1.0	1.0	1:無-9:極多	全場所平均
草丈(2番草)	37	36	cm	全場所平均
越冬性	6.0	5.6	1:極不良-9:極良	全場所平均
早春の草勢	5.2	5.2	1:極不良-9:極良	4調査平均
うどんこ病罹病程度	3.8	4.0	1:無または極微-9:甚	11調査平均
秋の被度(3年目) TY	53.0	54.1	%	4調査平均(根釧除く)
RC	18.6	17.8	%	4調査平均(根釧除く)
雑草・裸地	28.2	28.2	%	4調査平均(根釧除く)
3年目/2年目収量比RC+TY	107	108	%	4調査平均(根釧除く)
3年目/2年目収量比RC	61	61	%	5調査平均(単播込)

表2 マメ科率(%)

	2年目	3年目
SW Torun	36.1	21.6
アレス	34.6	19.1
	5場所	4場所

3年目に2場所に於いて虫害が発生

表3 混播試験における乾物収量の標準品種比(%)

	TY	RC	全体
SW Torun	102	121	107
アレス	136.0	59.8	195.7

3カ年合計収量の4場所平均(根刈を除く)、アレスは実測値(kg/a)

表4 単播試験の乾物収量(kg/a)

品種	1年目	2年目			3年目			3年間	標準比 %
	1番草	1番草	2番草	合計	1番草	2番草	合計	合計	
SW Torun	19.8	74.5	4.5	79.0	30.3	0.7	31.0	129.8	87
アレス	20.5	71.0	7.3	78.3	48.1	1.5	49.6	148.4	100
CV(%)	6.3	9.3	26.5	7.9	19.9	55.8	28.5	13.5	
LSD(%)	ns	ns	ns	ns	14.2	ns	14.8	ns	

注) 北農研のみで実施

3. 優良品種に採用しようとする理由

アカクローバは北海道の基幹マメ科牧草で、タンパク質やミネラルの供給源として重要であり、固定窒素の供給源として窒素肥料の軽減効果も期待できる。「SW Torun」は混播収量が標準品種より高く、越冬性がやや優れる晩生品種であり、近年栽培面積の増えているチモシー中生品種との混播に適しており、道内の高品質粗飼料生産に貢献することが期待できる。

4. 普及対象地域及び普及見込み面積

道内一円、9,900ha

5. 普及しうる種子量

30トン

6. 栽培上の留意点

チモシー中生品種との混播に利用する。